

---

# 白い世界からの旅立ち

kurora

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

白い世界からの旅立ち

### 【Nコード】

N2324S

### 【作者名】

kurora

### 【あらすじ】

目が覚めたら一面白い世界。

雪じゃ無くただ人工的に作られて白い天井と壁。

僕は何も知らないままこの白い世界から出る。

そんなお話。

## （前書き）

処女作のファンタジー小説を改訂中、突然浮かんだ物語です。  
本当はもっと長いのですがプロローグを短編として投稿いたしました。

もしかしたら連載小説に昇格するかもしれません。

「おはようございます」

僕は目が覚めて白い天井に向けて挨拶をした。

特に誰かに聞いて欲しいわけでもなかった、ただ目覚めたときにその挨拶が口から洩れて来た。

僕は誰の返事も返ってこない事を少し確認して上半身を上げる。

天井ばかり見ていた白い世界は視線を上から横に変えても白い世界に居ました。

視界に入るのは僕の寝ていたベッドと小さな机、壁とカーテン、白く光る電球、全てが人工的な白に染まった空間。

長い時間寝ていたのかもしれない、頭が上手く働かないし体がつっても重かった。

「誰かいないのかな……」

僕は静かすぎる白い世界で一人になっていた。

小鳥も風も小さな物音も聞こえないただ僕が布団を動かす時の擦れる音と僕自身の声しか聞こえなかった。

僕はさみしがり屋のようだった、この白い世界に一人だけしかないという現象が不安になって、早く誰かに会いたいと思う気持ちだけで体を持ち上げてベットから起き上がった。

僕の服装は病人患者の様な白い上下の格好だった。

「何処まで白が好きなんだろう」

白じゃないのはこの部屋には僕だけだった。

この部屋にずっといたら僕ももしかしたら少しずつ白くなってし

まうのかもしれない。

そんなことも考えながら僕は白いドアノブを回して白い世界に別れを告げる。

「……機械？」

白い世界から出た僕は一面の機械に驚いてしまった。

金属のコードや金属の塊が幾重にも重なりあい、絡み合っていた。白の世界とは対照的な銀と黒の沢山の機械が並べられた広場だった。

全く動く気配の無い機械を触てみると金属の冷たい感触が僕の手伝わった。

目が覚めて初めて温度という感覚を体感した僕は早く誰かの人肌を感じたい気持ちが強くなっていった。

「誰かいませんか？」

僕は機械の広場に響き渡るくらいの声を出して誰かを探している中、ふと一つの疑問が生まれた。

「……僕は誰を探しているんだろう？」

僕は自分以外の人間を知らなかった、もう目が覚めてから数十分も経ってから気が付くなんてと思いながら初めて僕自身の記憶を探ることにした。

目が覚める前、僕はどうやってあの白い部屋に行ったのだろうか……。

だけどその疑問は解決できなかった、何も思い出せない、そして僕はある事に気が付いた。

「あれ……僕は誰だ？」

僕は記憶が無かった……、生きていくうえで必要な情報だけが頭の中に入っていてそれ以外の自分が誰なのか、何処で生まれたのか、どうやって今まで生活していたのか。

気が付いた瞬間、僕は蹲って震えてしまった。

この誰もいない世界で記憶の無い僕が一人だけなのかもしれない、そんな事を考えた瞬間、恐怖で身動きが取れなくなってしまった。

ジリリリリリ……

僕が蹲り動かないまま数分が過ぎた時、目覚まし時計の様な音が遠くから聞こえてきた。

僕は自分以外から発する音に飛び上がって驚いてしまった。

今まで僕一人の世界に新しい存在が生まれた様な気持だった、すぐに僕はその音の方向に走った。

僕の体は自分が思うほど弱っていなかったみたいだった、ベッドに一人で寝ていたので自分が病人だと勝手に思っていただけかもしれない。

機械に触れないように走り数十メートル行った所に一つのドアがあった。

ドアの向こう側から音が聞こえている、ドアノブに手を当てた時に少しだけ躊躇したけど思い切ってドアを開く。

「……コンニチハ、オマチシテオリマシタ」

ドアを開き音の存在を確かめようとした時、その声が聞こえて来た。

声は何処か僕と違って片言で機械的だった。

僕はすぐに声を出している人物を探した。

「僕を待っていたの？ 君は何処に居るの？」

「少し視線ヲ、下ゲテ頂ケナイデショウカ」

僕は声の通りに頭を下げた、すると声の主が誰かがわかった。

だけどそれは人物ではなかった、丸い形でフワフワした毛皮を纏ったヒヨコだった。

「ヒヨコが喋ってる……」

「スミマセン、私ハ、ヒヨコデハアリマセン貴女ニ伝言ヲ届ケル為ニ作ラレタロボットデス」

「ロボットなんだ可愛いね、飛べるの？」

「ハイ、飛ベマス、丁度良イデス、私ニ着イテ来テクダサイ」

ヒヨコの形をした片言で喋るロボットは小さな翼をパタパタとさせながら喋り、ゆっくりと飛んでいく。

歩いた方が早いんじゃないかと思うほど低空飛行をするヒヨコロボットは15分書いて十数メートル先の机の前で止まった。

「私ハ確認デキマセンガ、コチラノ机ノ上ニ、封筒ガ置イテアルハズデス」

「うん、置いてあるよ、この封筒をどうすればいいの？」

「ソレハ、貴方ニ宛テタ手紙ガ入ッテイマス」

「僕に宛てた手紙？」

「ハイ、ソレヲ貴方ニ読ンデモラウ事ガ私ノ使命ナノデス」

「そうなんだ、じゃあ君の為にこれを読まないといけないね」

僕は机の上の封筒を開けて手紙を読み始める事にした。

~~~~~

~~~~~

目覚めたばかりの君へ。

多分、君は目覚ましの様な音に導かれ、ヒヨコに頼まれてこの手紙を読んでいるのだろう。

君は、記憶も無いし、何も持っていない。

初めて起きた部屋の様に真っ白な世界と一緒にんだ。

多分、君はこの手紙に自分が何者なのかを知る手がかりがあると思つて封筒を開きこの文章を読んでいるだろう。

だが、初めに言っておかないといけない事がある。

私は君を知っているし知っていない。

何故なら既にこの手紙を読んでいる君はもう私は何も知らないのだ。

私を知っているのは眠っていた時の君だ、もうこの手紙を読んでいる君を私はもう知る事は無いだろう。

さて、君が眠っていた時の話をさせてもらおう。

私は君の生みの親だ、だが君に名前をやっていない、君はまだ名前すらないのだ。

では何故君はこの年まで名前を与えられないで生きてきたのだろうと思つたのかもしれない、いや、もしかしたら既に気が付いているかもしれないな。

………君は人間じゃない、私が作つたロボットだ。

驚かしてしまったかな？それとも自分の存在が何者かが分かつて安心したのだろうか？

もしかしたら、何故君を作つたのかと怒っているかもしれない。

本当は私自身が君に説明したかつたのだがそれは叶う事は無い、と



ても残念だ。

君の表情、君の考え、君の行動、全てが私の興味の対象だ。

だがそれは叶う事はない、君が眠りから覚めた時、私は深い眠りにつくからだ。

何故私が眠らないといけないのか？ 君はそう思ったかもしれない、だがこれは私が説明する事ではないだろう、もしかしたら何処かで私に着いて知る事があるかもしれない。

その時君が生まれた理由と私が眠った理由が分かるかもしれない。私はそれをあまり望んではないが、これも君の自由だ、自分を知りたいなら存分に私が誰なのかを調べてくれて構わない。

最後に一つ、私のお願いを聞いて欲しい。

君はこの世界ではこの時まで一人だろう、白い世界から生まれたばかりの一人のロボットだ。

私は君にその白い世界に様々な色を付けて欲しいのだ。

この部屋を出てこの屋敷から出て、様々な世界を見てまわってほしい。

君は其中で沢山の事を学び、自分の意志と気持ちで行動を起こしてほしい。

世界は君を受け入れてくれないかもしれない、とても辛い経験をするかもしれない。

だが君には私や他の人間と違う可能性があるのだ。

本当は君と一緒に世界を旅したかった。

君と会話し、君と行動し、君と同じ道を歩みたかった。

だからそれが出来なかった私の為にどうか君だけでもこの世界に旅立ってほしい。

起きたばかりなのに長い文章を読ませてすまなかった。

ではこれから起こる君の物語がハッピーエンドで迎えられる事を

祈る。

君の生みの親より

~~~~~

手紙を読み終えて少し考えた。

正直この手紙の内容が本当なのかどうかわからなかった。  
だが、この人の思いは伝わった気がした。

「読ミ終ワリマシタカ？」

「ああ読み終わったよ、ありがとう、君のおかげだよ」

「ソレハ良カッタデス、コレデ私ノ役目モ終ワリマシタ」

「君はこれからどうするんだい？」

「ドウスルトハ？ 私ハ、モウ役目ヲ終エタ為、活動ヲ停止シマス」

「活動を停止？ 君はもう眠ってしまうの？ そんなの悲しいよ、  
僕と一緒にいこうよ」

僕は生れて初めて会ったこのヒヨコにお別れをまだ言いたくなかった。

手紙を読んで僕には何もない事がわかった。  
何も無いならこれから何かを探せばいいんだ。

そう、このヒヨコのロボットはもう僕の中の心と記憶に刻まれた。

「ソレハ、命令デスカ？」

「ううん、命令じゃないよ、これはお願いだ、もし良かったら僕と

一緒にこの世界を旅しよう」

「才願イデス力……ワカリマシタ、デハ、私ノマスターニ、ナツテ貰ッテヨロシイデス力？」

「うん、いいよ、じゃあ君に名前を付けないといけないね、うーん、じゃあ黄色いからキーちゃんで良いかな？」

「ハイ、マスター、コレカラ、ヨロシク才願イシマス」

「キーちゃんはもう少し喋り方を柔らかく出来ないかな？」

「少々才待チクダサイ……ジジッ……これでよろしいですか？」

「うん、じゃあ一緒に行こうか、僕の肩に乗せるね」

僕は手紙をズボンのポケットに入れて部屋を出る。

これから何があるかわからない。

もしかしたらとても素晴らしい世界かもしれない。

もしかしたらとても悲しい世界かもしれない。

僕は色々な感情をグルグルと混ぜ合わせながら機械の部屋を抜けキーちゃんにこの家の出口を教えてもらい部屋を出る。

「さあ旅に出ようか、キちゃん」

「はいマスター、何処までも着いていきます」

こうして僕の旅が始まったんだ。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n2324s/>

---

白い世界からの旅立ち

2011年10月8日14時24分発行